

税金は次世代への架け橋

下関市立川中中学校1年 小原 悠人

僕は六年生のときに学校で租税教室を受けた。授業を受ける前までは、税金は働く大人たちが支払うもので、子供には関わりがないと思っていた。しかし、税金は私たちの暮らしと深く関わっており公民館や役所、図書館などの公共施設が、税金で整備・管理されていることを学んだ。

その後、僕は税について興味を持ち考えるようになった。租税教室後「税に関する絵はがきコンクール」に参加した。僕は、税金が使われている学校や道路、地域安全のための警察や消防、街灯、ダム……。すると、当たり前に目に映るまちの風景ができていた。あらためて、普段何気なく利用している道路や公園などは、私たち一人ひとりが支払う税金によって、いつまでも安心して利用できるのだと僕は思った。

最近はニュースでも「物価が上がって生活が苦しい」という言葉を聞く。食べ物や光熱費が前よりも高くなっていると感じる人も多いのではと思う。そうしたことからだろうか「税金なんていらない。」「消費税を無くしてほしい。」という大人の声も聞く。確かに毎日の生活が大変だろうなかで、さらにお金を払うことは、つらいことだと思う。しかし、私たちの周りをよく見ると税金があるからこそ成り立っている社会、今がある。

例えば、僕たちが通っている学校や道路、緊急のケガや病気を起こしたときに乗る救急車。この例三つでも、とうてい個人では、まかないきれない金額になる。税金という素晴らしい仕組みがあるからこそ、まかないきれているのだ。

もし、「税金なんていらない。」という声を、子供たちが「税金はただ取られるもの」と思い込んでいくとどうだろうか。その子供たちは、税金の大切さを知らずに育つてしまふ。そして、納税意識が社会全体で低くなり、税収が減り行政支援が受けられなくなってしまうような社会の悪循環が起きてしまう。

税金への理解不足は、社会そのものを弱らせてしまう。だからこそ「税金はみんなで支えあうためのもの」ということを、まず自分たちが、しっかりと理解し、伝えていくことが大切だと思う。

税金は、私たちの暮らしを支え、未来を築く大切な役割を果たしており、行政支援は、税金によって維持され、一人ひとりの安心と安全をつくっている。

これからは、税金の大切さを僕たちが次の世代に伝えていく責任がある。僕は、小学校高学年からではなく、低年齢から税金と親しみを持てる機会を増やしていくことで納税への意識が高くなると思う。子供だけではなく様々な年代の人にも税金の大切さを伝え、どのようなものに税金を使えば良いか、国民全体で考えあうことが、持続可能な社会をつくる第一歩にもなり得るのではないだろうか。